

訳註『華嚴念仏三昧論』

中 村 薫

凡 例

- 一、本文は大日本統藏経を底本とし、夏字叢書『華嚴義海』下（河洛図書出版社）所収の『華嚴念仏三昧論』を参考とした。
- 二、本文は王文治の叙も含め、大きく叙・総・五門義・五問答・後記の五段に分けた。
- 三、上段が本文、下段が譯文である。譯文の中に①などと付してあるのは註記の番号で末尾にまとめて出した。
- 四、本文の引用の末尾の^文は譯文では省略した。
- 五、譯文の中で、書名には『』、引文には「」を用いた。また、『華嚴経』の各々の品も「」を用いた。
- 六、大正新修大藏経↓大正、大日本統藏経↓^卍統と略記した。
- 七、原則として本文は底本のままの字体を用い、〔註〕、譯文は通行のものを用いた。

- 八、引用文の中で、大正本の『華嚴経』文と異なっていると思われる箇処は、上段本文の上に記した。
- 九、譯文中で、西暦年号、現代地名（省名、縣名）等は（ ）に記した。
- 十、譯文中で、意味内容を明らかにするため∧ ∨に語句を補した。

〔附記〕 周知の如く、彭際清は（字允初、号知学帰子、尺木居士）

清末に於ける居士仏教の代表者の一人である。彼は、乾隆五年（一七四〇年）に長州に生まれ、嘉慶元年（一七九六年）に五十六歳で還帰するまで、凡そ十五篇の著書を残している。今この『華嚴念仏三昧論』は、乾隆四十八年（一七八三年十二月）に制作し、乾隆五十六年（一七九一年六月）に再録したものである。卍統では王文治の叙文に続いて、五義の念仏の法門に分けて「華嚴念仏三昧」の意義に

ついて述べ、最後に五つの問答を設けて群疑を詳破して一乗に帰することを述べている。なお、この『論』の内容検討については、拙稿「彭際清『華嚴念仏三昧論』について(一)」「(二)」（印仏研、31巻一号、34巻一号）をそれぞれ参照して頂くこととして今「解題」は略す。

なお、本文解説に当って横超慧日先生、安藤智信先生の御教授を頂いた。また、譯文の校正に当っては稲岡智賢学兄に労を煩わせた。伴せて謝意を表す。

△一九八六年三月十日▽

※叙は叙の別体。

華嚴念佛三昧論叙[※]

華嚴念仏三昧論叙

已統第一輯第二
編第九套第一冊
(以下略)

八十四帖左上

大乗起信論云。一切衆生不名爲覺。以從
本來念念相續。未曾離念。念者不覺也。
佛者覺也。念佛者以覺攝不覺也。念佛三
昧者。以覺攝不覺。入于正覺海也。

華嚴具諸佛一切三昧。而其間念佛三昧。
爲一切三昧中王。大莫過于是。方莫過于
是。廣莫過于是矣。

知歸居士修念佛三昧者十數年。而又于華
嚴義海。一門深入。頃過鎮江。出所著華
嚴念佛三昧論見示。舉清涼棗栢恒河沙字
數。而包舉以五六千言。覺疏鈔合論非
多。此論非少。且當棗栢著論時。行願全
品未至此方。故于他方淨土。輒生別異。
此品全出必待此論而義始完。其殆阿彌陀
佛神力加被。

『大乘起信論』に云く。^①「一切衆生を名づけて覺とは爲さず。本よ
りこのかた、念念相続するを以て、未だ曾て念を離れず」と。念とは
不覺なり。仏とは覺なり。念仏とは覺を以て不覺を攝するなり。念仏
三昧とは覺を以て不覺を攝して、正覺の海に入るなり。

華嚴は諸仏の一切の三昧を具し、而も其の間念仏三昧^②を一切三昧中
の王と爲す。大として是を過ること莫く、方として是を過ること莫
く、広として是を過ること莫し。^③

知歸居士、念仏三昧を修して十數年、而も又華嚴義海の一門に深入
せり。鎮江（江蘇省）を過ぐ頃、所著の『華嚴念仏三昧論』を出して
見示す。清涼棗栢^④、恒河沙の字数を挙げ、五六千言を以て包挙す。覺
は『疏』『鈔』と『合論』の多に非ず、此の『論』の少に非ず。且つ
當に棗栢が『論』を著すべき時、行願の全品は未だ此の方に至らず。^⑤
故に他方淨土に於いて輒ち別異を生ずるなり。此の品を全べて出する
に、必ず此の論を待つて義始めて完うせり。其れ殆んど阿彌陀仏の神
力の加被なり。

八十四帖左下

俾居士隨宜說法。廣導羣品者乎。竊謂念佛修淨土者。轉煩惱惡血。爲清淨法乳也。由念佛而獲三昧。所謂念歸無念。轉生乳爲熟酪也。于三昧中精進念佛。所謂無念而念。變熟酪爲生酥也。由念佛三昧。徧歷一切三昧。夫然後具足念佛三昧。變生酥爲熟酥也。以念佛三昧。統攝無量無邊不可說三昧。以無量無邊不可說三昧攝入念佛三昧。卽念卽佛。非念非佛。微妙神通不可思議。轉熟酥爲醍醐也。不能轉乳爲酪。雖念佛而不能得三昧門。不能變酪爲酥。不能以念佛三昧攝一切不可說三昧門。不能轉酥酪爲醍醐。不能以念佛一門。直超十地等覺。獲大圓鏡智。坐證無上菩提。夫念佛無差別。而三昧有淺深。三昧之淺深。念佛之差別也。文治自弱冠卽喜修禪。四十以後。始兼修念佛。比年來以念佛爲禪。復以禪念佛。禪淨並運。將終老焉。敢以所見質之居士。幸有以教我。歲次甲辰春三月無餘學人王文治撰。

居士は宜に随つて説法せしめ、広く群品を導く者か。竊に謂う。念佛して淨土を修せし者は、煩惱の惡血を転じて清淨なる法乳と爲すなり。念仏に由り三昧を獲るとは、所謂、念は無念に帰すなり。生乳を転じて熟酪と爲すなり。三昧中に念仏に精進するは、所謂、無念にして而も念なり。熟酪を變じて生酥と爲すなり。念仏三昧に由りて一切の三昧を徧歴す。夫れ然る後に念仏三昧を具足し、生酥を變じて熟酥と爲すなり。念仏三昧を以て無量無邊不可説の三昧を統攝し、無量無邊不可説の三昧を以て念仏三昧に攝入するなり。卽念卽佛、非念非佛、微妙神通不可思議にして熟酥を転じて醍醐と爲すなり。乳を転じて酪と爲すこと能はざれば、念仏と雖も三昧門を得ること能はず。酪を變じて酥と爲すこと能はざれば、念仏三昧を以て一切不可説三昧門を攝すること能はず。酥酪を転じて醍醐と爲すこと能はざれば、念仏一門を以て直ちに十地等覺を超え、大円鏡智を獲、坐して無上菩提を証すること能はず。夫れ念仏は無差別にして、而も三昧に淺深有り。三昧の淺深は念仏の差別なり。

文治^①弱冠より、即ち禪を修すを喜とす。四十以後始めて兼ねて念仏を修す。比年より来た念仏を以て禪と爲すなり。復た禪を以て念仏とするなり。禪淨並運にして將に老を終せんとす。敢えて所見を以て之を居士に質す。幸くばまた以て我を教えたまえ。歲次甲辰(一七八四年)春三月。無余學人王文治撰す。

華嚴念佛三昧論

菩薩戒弟子 彭際清 述

華嚴念仏三昧論

菩薩戒弟子 彭際清 述

総

※塗は途の別体。

念佛法門。諸經廣讚。約其總貫。略有二塗[※]。一普念。一專念。如觀佛相海經。佛不思議境界經等。但明普念。藥師琉璃光如來經。阿闍佛經。無量壽經等。特明專念。今此華嚴。一多相入。主伴交融。即自即他。亦專亦普。略標五義以貫全經。

八十五帖右上
一念佛法身直指衆生自性門。二念佛功德出生諸佛報化門。三念佛名字成就最勝方便門。四念毗盧遮那佛頓入華嚴法界門。五念極樂世界阿彌陀佛圓滿普賢大願門。別申問答豁破羣癡。普與見聞同歸一乘云爾。

念仏の法門は諸經に広く讚す。其の總貫を約すれば略して二途有り。一には普念。一には專念。『觀仏相海經』、『仏不思議境界經』等の如きは但だ普念を明す。『藥師琉璃光如來經』、『阿闍佛經』、『無量壽經』等は特に專念を明す。今、此の華嚴は一多相入、主伴交融、即自即他、亦專亦普にして、略して五義を標し、以て全經を貫く。

一は念仏法身直指衆生自性門なり。二は念仏功德出生諸佛報化門なり。三は念仏名字成就最勝方便門なり。四は念毗盧遮那佛頓入華嚴法界門なり。五は念極樂世界阿彌陀佛圓滿普賢大願門なり。別に問答を申ね^か豁^{くわ}く群癡を破し、普く見聞と同じく一乘に帰すと云う爾^になり。

五 門

第一 念仏法身直指衆生自性門

一念佛法身直指衆生自性者。吾人固有之性。湛寂光明。徧周塵刹。諸佛別無所證。全證衆生自性耳。

如來出現品云。

八十華嚴「如來出現品」
(大正10・275・b)に

は
※亦↓亦復
※徧↓徧とある。

菩薩摩訶薩應知自心。念念常有佛成正覺。何以故。諸佛如來不離此心成正覺故。如自心。一切衆生心亦如是。悉有如來成正覺。廣大周徧[※]。無處不有。不離不斷。無有休息。

又云。

無一衆生而不具有如來智慧。但以妄想顛倒執著。不能證得[※]。若離妄想。一切智自然智無礙智。則得現前。^文

八十華嚴「如來出現品」
(大正10・273・c)に
は
※不能證得↓而不證得
とある。

云何離于妄想。須知一切衆生顛倒執著。全是諸佛法身。何以故。顛倒執著常自寂滅故。于此信入。諸佛法身無處不現。清

一に仏の法身を念じて直ちに衆生の自性を指すとは、吾人固有の性は湛寂光明にして塵刹に徧周す。諸仏の別に所証無し。全く衆生の自性を証するのみなり。

「如來出現品」に云わく。

「菩薩摩訶薩は應に自心を知るべし。念々に常に仏有りて正覺を成ず。何を以ての故に、諸仏如來は此の心を離れずして正覺を成ずるが故なり。自心の如く、一切衆生の心も亦是の如く、悉く如來有りて等正覺を成ず。廣大周徧にして処として有らざる無し。不離不斷にして休息有ること無し」と。

又云わく。

「一衆生として具さに如來の智慧を有せざるもの無し。但だ妄想顛倒の執著を以て証を得ること能はず。若し妄想を離るれば、一切智自然智無礙智は則ち現前することを得ん」と。

云何が妄想を離れ、須く一切衆生の顛倒の執著を知るべきや。全く是れ諸仏の法身なり。何を以ての故に、顛倒執著するも常に自ら寂滅するが故に。此の信に入れば諸佛法身は、処として現ぜざること無く

八十五帖右下

淨圓滿。中不容他。念念不迷。心心無所。從此起行。具足大悲。究竟大慈。于身無所取。于修無所著。于法無所住。歷十住十行十回向十地十一地。不離當念因果圓成。故曰才發菩提。卽成正覺。如賢首品初發心功德品。廣明斯事。如是念佛。能于一切處見如來身。又如光明覺品。世尊放百億光明。從此三千大千世界。徧照十方。乃至盡法界虛空界。而文殊說頌。教人離于有無一異生滅去來種種諸見。徧一切處觀于如來。是爲入佛正信。出現品亦云。

八十華嚴「如來出現品」
(大正10・266・a)
にはすべて
※徧↓遍とある。
※于↓於とある。
※亦復↓亦とある。

諸菩薩摩訶薩。不應于一法一事一身一國土一衆生見于如來。應徧一切處見于如來。譬如虛空。徧至一切色非色處。非至非不至。何以故。虛空無身故。如來身亦復如是。徧一切處。徧一切衆生。徧一切法。徧一切國土。非至非不至。何以故。如來身無身故。爲衆生故示現其身。

又云。

清淨圓滿なり。中に他を容せず、念々に迷わず、心に所無し。此從り起行し、大悲を具足し、大慈を究竟す。身に所取無く、修に所著無く、法に所住無し。十住十行十回向十地十一地を歴し、不離にして、當に因果円成を念すべきが故に曰く、才に菩提を發して即ち正覺を成ずるものなり。「賢首品」「初發心功德品」に広く斯の事を明かすが如し。是の如くの念仏は能く一切處に如來身を見る。又、「如來光明覺品」の如し。世尊は百億の光明を放ち此の三千大千世界より十方乃至法界虛空界に徧照す。而も文殊は頌を説く。人をして有無・一異・生滅・去來の種々の諸見を離れ、一切處に徧し如來を觀ぜしむ。是れ仏の正信に入ると爲す。

「出現品」に亦云わく。

「諸の菩薩摩訶薩は應に一法・一事・一身・一國土・一衆生に如來を見たてまつるべからず。應に一切處に徧して如來を見たてまつるべし。譬えば虛空の徧く一切の色非色の處に至るも、至に非らず不至にあらざるが如し。何を以の故に、虛空は無身なるが故なり。如來の身亦復是の如し。一切處に徧し、一切の衆生に徧し、一切の法に徧し、一切の國土に徧するも至るにあらざらず。何を以ての故に、如來の身は無身なるが故なり。衆生の爲の故に其の身を示現すと。」

又云わく。

菩薩摩訶薩以無障無礙智慧。知一切世間境界。是如來境界。知一切三世境界。一切刹境界。一切法境界。一切衆生境界。眞如無差別境界。法界無障礙境界。實際無邊際境界。虛空無分量境界。無境界境界。是如來境界。佛子。如一切世間境界無量。如來境界亦無量。如一切三世境界無量。如來境界亦無量。乃至如無境界境界無量。如來境界亦無量。如無境界境界一切處無有。如來境界亦如是一切處無有。文竟

八十五帖左上

何以故。以自心智慧本無障礙故。無障礙智慧卽如來境界故。此名念自性佛。亦名自性念佛。自性念佛者。無佛外之念能念于佛。念自性佛者。無念外之佛爲自所念。不入此門。所念之佛終非究竟。以不識法身自性故。將謂別有故。入此門時。一念功德過于虛空。無有限量

「菩薩摩訶薩は無障無礙の智慧を以て一切世間の境界は是れ如來の境界なることを知る。一切の三世の境界、一切の刹の境界、一切の法の境界、一切衆生の境界、眞如無差別の境界、法界無障礙の境界、實際無邊際の境界、虛空無分量の境界、無境界の境界は是れ如來の境界なることを知る。佛子、一切世間の境界の無量なるが如く、如來の境界も亦無量なり。一切の三世の境界の無量なるが如く、如來の境界も亦無量なり。乃至無境界の境界の無量なるが如く、如來の境界も亦無量なり。無境界の境界の一切處に有ること無きが如く、如來の境界も亦是の如く一切處に有ること無し」と。

何を以ての故に、自心の智慧本より障礙無きを以ての故なり。障礙無き智慧は卽ち如來の境界なるが故なり。此を念自性仏と名づく。亦自性念仏と名づく。自性念仏とは、仏外の念無く、能く仏を念するものなり。念自性仏とは、念外の仏無くして、自らの所念と爲す。此門に入らずんば、所念の仏終に究竟にあらざるなり。法身の自性を識らざるを以ての故に將に別有と謂うなり。故に此門に入る時、一念の功德虚空を過ぎ限量有ること無きなり。

二 念仏功德出生諸仏報化門

二念佛功德出生諸佛報化者。一切如來稱法界量。現種種身。示無盡莊嚴。作無邊佛事。

一以普光明智而爲其體。

如世主妙嚴品云。

智入三世。悉皆平等。其身充滿一切世間。

其音普順十方國土。譬如虛空具含衆像。

于諸境界無所分別。文

以此智不思議故。無分劑故。爲能具足如

斯力用。在凡夫地。聞法入理。得根本

智。苟不能依智起行。圓修圓證。墮于二

乘聲聞境界。諸佛大用不得現前。是故此

經初會六品。全顯如來果德。二會至八會

三十二品。明進修階次。直至菩提。總之

不出六位因果。爲令行者昭廓智境。文窮諸

行門。不取偏空而嚴佛土。而初會中普賢

三昧一品。正顯佛華嚴全體。經明普賢菩

薩。入一切諸佛毗盧遮那藏身三昧。

此三昧者。依于法界。稱性徧周。一切刹

二に仏の功德を念じ諸仏の報化を出生するとは、一切の如來は法界の量に稱いて種種の身を現じ、無尽の莊嚴を示して無邊の仏事を作すものなり。

一に普光明智を以て而も其の體と爲す。

「世主妙嚴品」に云うが如し^⑧

「智は三世に入りて悉く皆な平等に、其の身は一切の世間に充滿し、其の音は普く十方の國土に順う。譬えば虚空の具に衆像を含みて諸の境界において分別する所無きが如し」と。

此の智不思議を以ての故に、分劑無きが故に能く具足と爲す。斯の力用の如く、凡夫地に在りて聞法して理に入り根本智を得るなり。苟しくも智に依って起行すること能はざれば、円修円証すれども二乘声聞の境界に墮し、諸仏の大用は現前することを得ず。是の故に此の經の初會六品、全て如來の果德を顯わし、二會より八會に至る三十二品は進修の階次を明かして直ちに菩提に至る。総て六位の因果を出でず。行ぜしめんと爲す者をして、昭廓智境とし、諸の行門を窮む。偏空を取らずして仏土を嚴り、而も初會中の普賢三昧の一品は正しく仏の華嚴全体を顯わすものなり。『經』に普賢菩薩、一切諸佛毗盧遮那藏身三昧に入るを明かす。^⑨

此の三昧は、法界に依り、性に稱いて徧周す。一切刹塵は普く身に

八十華嚴

「世主妙嚴品」
(大正10・11c)

には
※于↓於とある。

※この場合

「爲れ行者をして昭廓
智境たらしめん」と説

むべきか。

※偏は徧の誤植

八十五帖左下

塵。普身示現。教諸衆生不舍塵勞。繁興大用。隨說世界成就品。說華藏世界品。以示淨穢諸刹。一切唯心。唯能深入普賢願海者。一切處無非佛土。一切時無非佛事。此三昧品貫徹全經。尋文自見。至善財童子徧參知識。而德雲比丘。解脫長者。鞞瑟胝羅居士。俱以念佛一門而得解脫。

如德雲言。

我得自在決定解力。信眼清淨。智光照耀。普觀境界。離一切障。善巧觀察。普眼明徹。具清淨行。往詣十方一切國土。恭敬供養一切諸佛。常念一切諸佛如來。總持一切諸佛正法。常見一切十方諸佛。文

我得自在決定解力以下。即念法身佛也。往詣十方以下。即念報化佛也。隨順法身。起于報化。法身無量。所感報化亦復無量。

故下文云。

見于東方一佛二佛十佛百佛千佛百千佛乃至不可說不可說佛。刹微塵數佛。如東方。

※以下の文は八十華嚴「入法界品」(大正10・334・b)より略出。
※于↓於とある。

示現す。諸の衆生をして塵勞を捨てずして、大用を繁興せしむ。隋つづいて「世界成就品」を説き「華藏世界品」を説く。以て淨穢の諸刹は一切唯心を示すなり。唯能く普賢の願海に深入するとは、一切処は仏土に非ざること無く、一切時は仏事に非ざること無し。此の三昧品は全經に貫徹す。文を尋ね自ら見つべし。善財童子徧く三知識に至る。而も德雲比丘、解脫長者、鞞瑟胝羅居士、俱に念仏一門を以て解脫を得るなり。

德雲の言うが如し。^⑧

「我れ自在にして決定せる解力を得て、信眼清淨に智光照耀し、普く境界を觀じて一切の障を離れ、善巧に觀察し、普眼明徹にして清淨の行を具し、十方一切の國土に往詣して一切の諸仏を恭敬し供養して、常に一切の諸仏如來を念じ、一切の諸仏の正法を總持し、常に一切の十方諸仏を見たてまつる」と。

「我得自在決定解力」以下は即ち、法身仏を念ずるなり。「往詣十方」以下は即ち、報化仏を念ずるなり。法身に隨順して報化を起こして法身無量なり。所感報化にして亦復無量なり。

故に下の文に云う。^⑨

「東方に一仏二仏十仏百千佛乃至不可說不可說刹微塵數の仏を見たてまつる。東方の如く、南西北方、四維上下亦復是の如

南西北方四維上下亦復如是文

是名憶念一切諸佛境界智慧光明普見法門。諸佛別無境界。唯以智慧光明。隨順衆生而作佛事。此念佛人亦復如是。由信解具足故。能入佛智慧。由觀行具足故。能見佛光明。智慧光明。不從人得。唯藉緣因得顯發故。

八十六帖右上
下文又開諸大菩薩三七念佛門。盡于十方三世及一一毛端量處。念念佛出世。念念佛說法。念念佛滅度。一以自心無邊智行而爲其體。本具三身。一念相應。名爲念佛三昧。入此三昧門。卽能徧攝一切諸三昧門。

又如解脫長者言。※

以下の文は八十華嚴
「入法界品」(大正10
・339・c)と340・a)よ
り略出。

我入出如來無礙莊嚴解脫門。見十方各十佛刹微塵數如來。彼諸如來不來至此。我不往彼。我若欲見安樂世界阿彌陀如來。隨意卽見。我若欲見梅檀世界金剛光明如來。妙香世界寶光明如來。蓮華世界寶蓮華光明如來。妙金世界寂靜光如來。妙喜世界不動如來。善住世界師子如來。鏡光

し」と。

是れを「憶念一切諸佛境界智慧光明普見法門」と名づく。諸佛に別の境界無し。唯、智慧の光明を以て衆生に隨順して仏事を作す。此れ念仏の人亦復是の如し。信解具足に由るが故に能く仏の智慧に入る。觀行具足に由るが故に能く仏の光明を見たてまつる。智慧光明は人に従り得ず、唯、緣因を藉いて顯發を得るが故なり。

下の文に又、諸の大菩薩三七念佛門を開く。⑧十方三世及び一一の毛端の量處を尽くす。念念に仏は出世し、念念に仏は說法し、念念に仏は滅度す。一に自心の無辺の智行を以て其の體と爲す。本に三身を具す。一念相應は名づけて念仏三昧と爲す。此の三昧門に入らば、即ち能く一切諸の三昧門を徧攝するなり。

又解脫長者の言いが如し。⑨

「我れ如來無礙莊嚴解脫門に入出、十方各十刹微塵數の如來を見たてまつるに、彼の諸の如來は此に來せず。我れも彼に往かず。我れ若し安樂世界の阿彌陀如來を見たてまつらんと欲せば、意に隨いて即ち見たてまつる。我れ若し梅檀世界の金剛光明如來、妙香世界の寶光明如來、蓮華世界の寶蓮華光明如來、妙金世界の寂靜光如來、妙喜世界の不動如來、善住世界の師子如來、鏡光明世界の月覺如來、寶師子莊嚴世界の毗盧遮那如來を見たてまつらんと欲せば、是の如きを

『經』には

※毗↓毘

※已↓己

※以下與
とある。

明世界月覺如來。寶師子莊嚴世界毗盧遮那如來。如是一切悉皆即見。知一切佛及以我心。悉皆如夢。知一切佛猶如影像。自心如水。知一切佛所有色相。及以自心。悉皆如幻。知一切佛及以已心。悉皆如響。我如是知。如是憶念。所見諸佛皆由自心。文

八十六帖右下

所謂無礙莊嚴解脫者。離一切相。成一切相。雖然如夢如幻。而亦不壞夢幻諸境。若不入此夢幻法門者。便如舍利弗大目犍連等在逝多林。不見如來神力境界。以善根不同故。

又如鞞瑟胝羅言。

※以下の文は八十華嚴「入法界品」(大正10・366・b)の略出。

我開梅檀座如來塔門時。得三昧名佛種無盡。我入此三昧。隨其次第。見此世界一切諸佛。所謂迦葉佛。拘那含牟尼佛。拘留孫佛。尸棄佛。毗婆尸佛。提舍佛。弗沙佛。無上勝佛。無上蓮華佛。如是等而爲上首。于一念頃。得見百佛千佛百千佛。乃至不可說不可說世界微塵數佛。文此佛種無盡。皆由普賢願行所生。蓋普賢

一切悉く皆な即ち見たてまつる。一切の仏と及以我心は悉く皆な夢の如くなるを知り、一切の仏は猶お影像の如く、自心は水の如くなるを知り、一切の仏の所有る色相と及以自心は悉く皆幻の如くなるを知り、一切の仏と及以己心は悉く皆響の如くなるを知る。我れ是の如くなるを知り、是の如く憶念して、見る所の諸仏は皆な自心に由る」と。

所謂、無礙莊嚴解脫とは、一切相を離れ、一切相を成ず。然りと雖ども夢の如く幻の如くして而も亦夢幻の諸境を壞せず。若し此の夢幻の法門に入らずんば、便ち舍利弗大目犍連等の如く、逝多林に在りて如來の神力の境界を見ず。善根を以て同せずが故に。

又鞞瑟胝羅の言が如し。2)

「我れ梅檀座の如來の塔門を開く時、三昧を得て仏種無尽と名づく。我れ此の三昧に入り、其の次第に隨いて此の世界の一切の諸佛を見たてまつる。所謂、迦葉仏、拘那含牟尼仏、拘留孫仏、尸棄仏、毗婆尸仏、提舍仏、弗沙仏、無上勝佛、無上蓮華佛、是の如き等を上首と爲す。一念の頃に於いて、百佛・千佛・百千佛乃至不可說、不可說世界の微塵數佛を見たてまつることを得る」と。

此の仏種無尽は皆な普賢の願行の所生に由る。蓋し普賢願行は、俱

『經』には

※毗↓毘とある。

※于↓於とある。

願行。俱以四無盡句而得成就。所謂虛空界盡。衆生界盡。衆生業盡。衆生煩惱盡。我願乃盡。而虛空界乃至煩惱無有盡故。是則佛種無盡。故曰我知十方一切如來。畢竟無有般涅槃者。是知諸佛報化。該一切數。如阿僧祇品說。窮一切時。如如來壽量品說。徧一切處。如菩薩住處品說。如是念佛。二際平等。生滅一如。盡未來劫無有間斷

三念佛名字成就最勝方便者。夫法身無朕假于名而法身顯矣。報化無邊。緣于名而報化該矣。

八十六帖左上

八十華嚴「須彌頂上偈讚品」(大正10・83・a)には

※甯↓寧とある。

※于↓於とある。

※已↓已の誤植。

「文殊師利所說摩訶般若波羅密經卷下」(大正8・731・b)には

※空閑↓空閑とある。
※舍↓捨とある。

須彌偈讚品云。
甯受地獄苦。得聞諸佛名。不受無量樂。而不聞佛名。所以于往昔。無數劫受苦。流轉生死中。不聞佛名故。但聞佛名。已植勝因。何況數數繼念。如文殊般若經云。
欲入一行三昧。應處空閑。舍諸亂意。不

に四無盡句を以て成就することを得。所謂、虛空界盡、衆生界盡、衆生業盡、衆生煩惱盡、我願乃ち尽きる。而るに虚空界乃至煩惱に尽ること無きが故に是れ則ち仏種無尽なり。故に曰く、我れ十方一切の如來を知る。畢竟して般涅槃する者有ること無し。是れ諸仏報化と知るなり。一切數に該して「阿僧祇品」に説くが如し。一切時に窮して「如來壽量品」に説くが如し。一切處に徧して「菩薩住處品」に説くが如し。是の如き念仏は二際平等、生滅一如にして尽未來劫に間斷有ること無し。

三 念仏名字成就最勝方便門

三に仏の名字を念じ最勝の方便を成就するとは、夫れ法身は無朕なれど、名を法身に仮りて顯わす。報化は無辺なれど、名を報化に縁りて該ぬ。

「須彌偈讚品」に云わく。

「甯ろ地獄の苦をも受けん。諸仏の名を聞くことを得んには、無量の樂を受けじ。仏の名を聞かざらんには、所以に往昔において、無數劫に苦を受けて、生死の中に流轉せり。仏の名を聞かざりしが故に」と。但だ仏名を聞き、已に勝因を植え、何をか況んや教數の繼念をや。『文殊般若經』に云うが如し。

「一行三昧に入らんと欲せば、応に空閑に処し、諸の亂意を舍すべ

※于↓於とある。

取相貌。繫心一佛。專稱名字。隨佛方所。端身正向。能于一佛念念相續。即是念中能見過去未來現在諸佛何以故。念一佛功德無量無邊。亦與無量諸佛功德無二竟文阿彌陀經亦以執持名號。爲往生正因。故知名字功德不可思議。

又如兜率偈讚品云。

以佛爲境界。專念而不息。此人得見佛。其數與心等。

賢首品云。

若常念佛心不動。則常觀見無量佛。若常觀見無量佛。則見如來體常住。

八十華嚴「賢首品」
(大正10・73・a)
には
※常↓能とある。

前偈論持名。故言數。後兼報化以徹法身。故言無量。雖然。人知有量之數。而莫知離量之數。知即數之名。而不知離數之名。知離數之名故終日念而未嘗念也。知離量之數。故念一佛而即徧攝一切佛也。

如隨好光明品云。

如我說我而不著我。不著我所。一切諸佛亦復如是。自說是佛。不著于我及以我

八十華嚴「如來隨好光明功德品」
(大正10・256・a)
には
※及以我所↓不著我所とある。

し。相貌を取らず心に一仏を繫し、専ら名字を稱す。仏の方所に隨つて身を正向に端ず。能く一仏を念念相續す。即ち是れ念中に能く過去未來現在の諸仏を見たてまつる。何を以ての故に。一仏の功德無量無邊なるを念じ、亦、無量諸仏の功德と無二なり」と。

『阿彌陀經』²⁶⁾に亦、「執持名号を以て往生の正因となす」と。故に名字功德の不可思議なるを知る。

又、「兜率偈讚品」に云うが如し。²⁷⁾

「仏を以て境界と爲し、專念して息まざれば、此の人は仏を見ることを得。其の数は心と等し」と。

「賢首品」に云わく。²⁸⁾

「若し常に念仏の心動ぜざれば、則ち常に無量の仏を觀見せんや。若し常に無量の仏を見すれば、則ち如來の体の常任なることを見たてまつる」と。

前の偈は持名を論ずるが故に數と云う。後は報化を兼ねて法身に徹するを以ての故に無量という。然りと雖も人有量の數を知り。而も離量の數を知ること莫し。知は即ち數の名なり。不知は離數の名なり。離數の名を知るが故に終日念じ、而も未だ嘗て念ぜざるなり。離量の數を知るが故に一仏を念じ、即ち一切の仏を徧攝するなり。

「隨好光明品」に云うが如し。²⁹⁾

「我れ我と説きて我れに著せずして我所に著せざるが如く、一切の諸仏も亦復是の如し。自らはれ仏なりと説きて我及以我所に著せず」

※于↓於とある。

所。*
竟文

八十六帖左下

然初入此門。必依乎數。日須尅定課程。
自一而萬。自萬而億。念不離佛。佛不異心。如月在水。月非水內。如春在枝。春非枝外。如是念佛。名字卽法身。名字性不可得故。法身卽名字。法身徧一切故。乃至報化不異名字。名字不異報化。亦復如是。

故如來名號品。

謂一如來名號。與法界虛空界等。隨衆生心各別知見。則知世間凡所有名。卽是佛名。隨舉一名。諸世間名無不攝矣。

又如毗盧遮那品稱引古先諸佛。各各不同。而一以毗盧概之。以一切諸佛皆有毗盧藏身故。古今不異故。如是念佛。持一佛名。全收法界。全法界名。全法界收。非過去。非現在。非未來。亦非南西北方四維上下。十方三世。當念無餘。不歷刹那。成佛已竟。*

※已は已の誤植

と。

然るに初めに此の門に入らば、必ず數に依る。曰く。須らく課程を尅定すべし。一自り万、万自り億、念じて仏を離れず。仏の心に異ならず。月水に在りて月水内に非らざるが如し。春に枝在りて、春の枝外に非らざるが如し。是の如く仏を念ず。名字即ち法身なり。名字の性は不可得故に法身即ち名字なり。法身は一切に徧ねくが故に乃至報化は名字に異ならず。名字は報化に異ならず。亦復是の如し。

故に「如來名號品」の如し。*

「謂く。一つの如來の名号は、法界虛空界と等し。衆生心に随って各別に知見す。則ち知世間は凡そ所有の名なり。即ち是れ仏名なり。

一名を挙るに随えば、諸の世間の名に攝せざるは無し」と。

又「毗盧遮那品」の如く、稱して古くは先の諸仏を引く。各各不同にして、而も一の毗盧を以て之を概る。一切の諸仏に皆な毗盧藏身有るを以ての故に。古今異ならざる故に是の如く仏を念ず。一仏の名を持し、全て法界に収む。法界の名を全し、法界の収を全す。過去に非ず現在に非ず、未來に非ず。南西北方四維上下十方三世に非ず。當念にして余無し。刹那に歷ずして、成佛已に竟る。

四 念毗盧遮那仏頌入華嚴法界門

四念毗盧遮那佛頌入華嚴法界者。如世主妙嚴品十方諸大菩薩及天龍神鬼所說諸頌。各出自證法門。以如來果地發人信解。令人念佛三昧。自是說如來現相品。以及十信十住十行十回向。各有十方諸大菩薩及諸世主說偈讚佛。而十地品每歷一地。必曰不離念佛念法念僧。是知諸位階次雖殊。莫不以念佛爲其本行。佛佛道同。舉一毗盧攝無不盡。

八十七帖右上

※以下の文は四十華嚴「大正10・845・c」より略出。

故普賢十願常隨佛學一門云。^{*}

如此娑婆世界毗盧遮那如來。從初發心。精進不退。以不可說不可說身命而爲布施。乃至成大菩提。入于涅槃。如是一切我皆隨學。^文

由我本師因地修行。廣大無邊不可思議。故所感報化。亦廣大無邊不可思議。行者誠能決定信解。知一切佛不離自性。起勇猛心。起儻何心。便與本師初發心時等無有異。又如寂靜音海夜神言。^{*}

※以下の文は八十華嚴「入法界品」(大正10・386・c 391・a) b、401・b)よりそれぞれ略出。

四に毗盧遮那仏を念じて華嚴法界に頌入するとは、「世主妙嚴品」の如く、十方の諸大菩薩及び天龍神鬼、所説の諸頌は各自証法門より出る。如來の果地を以て人に信解を發し、念仏三昧に入らしめ、自ら是に「如來現相品」を説く。以て十信、十住、十行、十廻向に及ぶに、各の十方諸の大菩薩と及び諸の世主有りて偈を説き仏を讚し、而も「十地品」では一地を歴る毎に必ず不離念仏念法念僧と曰えり。^②是れ諸位階次を知り殊なると雖ども、念仏を以て其の本行と為ざるは莫し。仏と仏道同じく、挙ぐ一毗盧の撰にして尽さざること無し。

故に普賢の十願の常隨仏學の一門に云う。^②

「此の娑婆世界の毗盧遮那如來の如し。初發心從り精進不退にして、不可說不可說の身命を以て布施と為す。乃至大菩提を成じ涅槃に入る。是の如く一切の我は皆な隨學す」と。

我が本地の因地の修行は、廣大無邊不可思議なるに由るが故に所感報化なり。亦、廣大無邊不可思議の行は、誠に能く信解を決定し、一切の仏は自性を離れざるを知る。勇猛心を起こし、儻何心を起こし、便ち本師と初發心時等に異なり有ること無し。又、寂靜音海夜神の言うが如し。^②

『經』には
※得↓獲とある。
※毗↓毘とある。
※于↓於とある。
※徧↓遍とある。
※已は已の誤植

八十七帖右下

以下の偈文は八十華嚴
「入法界品」(大正10
・442・c~443・b)よ
り略出。
※毗↓毘とある。

我得念念出生廣大喜莊嚴解脫。已能入十
不可說不可說佛刹微塵數法界安立海。見
彼一切法界安立海。一切佛刹所有微塵。
一一塵中。有十不可說不可說佛刹微塵數
佛國土。一一佛土。皆有毗盧遮那坐于道
場。于念念中成正覺。現諸神變。所現
神變。一一皆徧一切法界海。而開敷樹華
夜神入出生廣大喜光明解脫門。憶念毗盧
遮那往昔所修行海。悉皆明見。妙德圓滿
神得自在受生解脫門。入毗盧遮那無量受
生海。亦見如來于一切世界一一塵中無量
佛刹。示現受生。常無間斷。寛文

如是念于毗盧遮那卽念是佛。卽佛是念。
盡十方虛空乃至鍼鋒芥子許。無一不是毗
盧法界。是名念法界佛。亦名徧念一切
佛。所以善財童子初參德雲。卽聞念佛法
門。最後普賢菩薩爲說稱讚如來勝功德徧
教人信解。依舊不離念佛法門。法界始
終。更無二諦。
偈曰。※

或見此界妙無比。佛無量劫所嚴淨。毗盧

「我れ念念出生広大喜莊嚴解脫を得たり。已に能く十不可說不可說の仏刹微塵數の法界安立海の一切の仏刹の所有る微塵を見たまつるに、一一の塵中に不可說不可說の仏刹微塵數の仏國土有り。一一の仏土に皆な毗盧遮那有りて道場に坐し、念念の中に於いて等正覺を成じ、諸の神變を現す。所現の神變は一一皆な一切法界海に徧じ、而も開敷樹華夜神は、出生広大の喜光明解脫門に入りて、毗盧遮那の往昔に修せし所の行海を憶念し、悉く皆な明らかに見たたまつる。妙徳円満神は、自在の受生解脫門を得たり。毗盧遮那の無量の受生海に入り、亦如來を見たまつる。一切世界に於いて一一の塵の中に無量の仏刹を示現して受生し、常に間斷無し」と。

是の如くの念は毗盧遮那において、卽念是仏、卽仏是念なり。十方虛空乃至鍼鋒芥子許を尽くし、一として是れ毗盧法界ならざる無し。是れ念法界仏と名づく。亦徧念一切仏と名づく。所以に善財童子の初めて德雲に參りて、即ち念仏法門を聞き、最後に普賢菩薩は如來の勝功德を稱讚する偈を説きて、人をして信解教しむると爲す。旧に依りて念仏法門を離れず。法界の始終には更に二諦無し。

偈して曰わく。※

「或は此の界は妙にして比ひ無く、仏の無量劫に嚴淨する所、毗盧

※于↓於とある。

※巳は巳の誤植

※以下の偈文は八十華嚴「入法界品」(大正10・443・a、b)より略出。

※巳は巳の誤植

遮那最勝尊。于中覺悟成菩提。或有見佛無量壽。觀自在等所圍繞。悉巳住于灌頂地。充滿十方諸世界。

又云。

或見釋迦成佛道。巳經不可思議劫。或見今始爲菩薩。十方利益諸衆生。或見如來無量壽。與諸菩薩。授尊記。而成無上大導師。次補住于安樂刹。

文

是知諸佛法界。徧攝徧融。彌陀全體遮那極樂不離華藏隨衆生心。見各不同。而佛本來常不動故。故末卷即以回向極樂終之。具如後文所說。

五 念極樂世界阿彌陀仏円満普賢大願門

五念極樂世界阿彌陀仏円満普賢大願者。普賢行願品云。

欲成就如來功德門。當修十種廣大行願。

一者禮敬諸佛。二者稱讚如來。三者廣修供養。四者懺悔業障。五者隨喜功德。六者請轉法輪。七者請佛住世。八者常隨佛學。九者恒順衆生。十者普皆回向。于此願王受

遮那最尊は、中に於いて覺悟して菩提を成ずるを見たてまつる。或は有るは仏無量壽の觀自在等に圍繞せられ、悉く巳に灌頂地に住して十方の諸の世界に充滿するを見たてまつる」と。

又云く。

「或は釈迦仏道を成じて、巳に不可思議の劫を経たるを見たてまつり、或は今始めて菩薩と爲り、十方に諸の衆生を利益するを見たてまつる。或は如來無量壽は諸の菩薩の与に尊記を授け、無上の大導師と成りて、次に安樂の刹に補住するをみる」と。

是れ諸仏の法界の徧攝徧融するを知り、彌陀は全く遮那極樂を体とし、華藏を離れずに衆生心に随い、各不同なるを見る。仏は本來常に不動なるが故に末卷に即ち廻向極樂を以て之を終る。具に後文の所説の如し。

五に極樂世界阿彌陀仏を念じ普賢の大願を円満にするとは、「普賢行願品」に云わく。

「如來の功德門を成就せんと欲せば、當に十種の広大の行願を修すべし。一は礼敬諸佛、二は稱讚如來、三は広修供養、四は懺悔業障、五は隨喜功德、六は請転法輪、七は請仏住世、八は常隨佛學、九は恒順衆生、十は普皆廻向、此の願王において受持誦誦し、命終の時に臨んで即ち極樂世界に往生す」と。

八十七帖左上

四十華嚴卷第四十
(大正10・844・b)
※于↓於

持讀誦。臨命終時。卽得往生極樂世界。竟文

是經專顯毗盧境界。云何必以極樂爲歸。蓋阿彌陀一名無量光。而毗盧遮那此翻光明徧照。同一體故。非去來故。于一體中。要亦不礙去來故。

如大乘起信論云。

衆生初學是法。欲求正信。其心怯弱。以住此娑婆世界。不能常值諸佛。親承供養。意欲退者。當知如來有勝方便。攝護信心。謂專念西方極樂世界阿彌陀佛。所修善根。回向願求生彼世界。卽得往生。常見佛故。終無有退。竟文

蓋毗盧報土。與二乘凡夫無接引之分。而極樂則九品分張。萬流齊赴。一得往生。橫截生死。視此娑婆。迴分勝劣。諸經廣明。今不具錄。然他經所指。或言十念。或言一日乃至七日。或觀丈六。乃至六十萬億那由他恒河沙由旬。要之不出數量。未若此經一念普觀。豎窮三世。橫亘十虛。初發心時。卽超數量。所有淨因。最

是の『經』は専ら毗盧の境界を顯わす。云何が必ず極樂を以て歸と爲すや。蓋し阿彌陀一つに無量光と名づけ、而も毗盧遮那は此れ光明徧照と翻す。同一の體故に、去來に非らざるが故に、一體の中において要す去來を礙げざるが故に。

『大乘起信論』に云うが如し。^⑨

「衆生初め是の法を學し、正信を欲求するも其の心怯弱なり。此の娑婆世界に住するを以て、常に諸仏に値つて親承供養すること能はず。意退せんと欲するは、當に知るべし。如來勝方便ありて信心を攝護す。謂く、専ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念じて修する所の善根を廻向して、彼の世界に生ぜん」と願求せば、即ち往生することを得。常に仏を見るが故に終に退すること有ること無し」と。

蓋し、毗盧の報土は、二乘凡夫と接引の分無し。而も極樂は則ち九品の分張なり。万流齊しく赴き一に往生することを得。横に生死を截し、此の娑婆を視、迴して勝劣を分け、諸經広明なり。今、録を具せず。然るに他經の指す所に、或は十念と言ひ、或は一日乃至七日と言ひ、或は丈六乃至六十萬億那由他の恒河沙由旬を觀ず。之を要すに數量を出さず。未だ若かず。此の經は一念普觀なり。豎に三世に窮し、横に十虚に亘る。初發心時に即ち數量を超え、所有る淨因のなか最も殊勝と爲し、阿彌陀佛に由り、四十八願を以て衆生を徧攝す。此の

爲殊勝。由阿彌陀佛以四十八願徧攝衆生。與此願王體合虚空絲毫不隔。是故不移時。不易處。任運往生。還同本得。

下文云。

※巳は巳の誤植
※四十華嚴(大正10・846・c)には以下「此諸菩薩色相端嚴。功德具足」の文あれど今は略す。

願王の体と合すれば虚空にして絲毫を隔てず。是の故に時を移さず。処を易えずして任運に往生す。還て本より得るに同じ。

下の文に云わく。⑤

「到り巳て即ち阿彌陀仏を見たてまつる。文殊師利菩薩・普賢菩薩・觀自在菩薩・弥勒菩薩等、共に圍繞せしむ」と。

文殊普賢。不離此處而現彼方。隨衆生心。念念出現。故知阿彌陀佛在極樂國中。常轉此經。熾然無間。又此法門。非妙智觀察。無以明我心本具之淨因。故首文殊。非大願莊嚴。無以圓我心本具之淨果。故次普賢。而觀音彌勒。一則次補彌陀。一則次補釋迦。二聖同會。以證樂邦華藏通一無二。而彌勒以諦觀十方唯識。識心圓明。入圓成實。此淨土之正因也。觀音以如幻聞熏無作妙力。徧入國土。成就菩提。此淨土之極果也。

下文云。

其人自見生蓮華中。蒙佛授記。得授記已。經于無數百千萬億那由他劫。以智慧力。隨衆生心而爲利益。不久當坐菩提道場。

※巳は巳の誤植
※四十華嚴(大正10・846・c)には以下「普於十方不可說不可說世界」の文あれど今は略す。

「到り巳て即ち阿彌陀仏を見たてまつる。文殊師利菩薩・普賢菩薩・觀自在菩薩・弥勒菩薩等、共に圍繞せしむ」と。
文殊・普賢、此の処を離れずして彼方を現じ、衆生心に隨う。念念に出現するが故に阿彌陀仏の極樂國中に在るを知り、常に此の經を轉じて熾然して無間なり。又、此の法門は妙智を觀察し、以て我心の本具の淨因を明かすこと無きに非らざるが故に文殊を首とす。大願の莊嚴は以て我心の本具の淨果を円にすること無きに非らざるが故に普賢を次とす。而も觀音・弥勒は、一にして則ち次に彌陀を補い、一にして則ち次に釈迦を補う。二聖同會にして樂邦華藏を証するを以て一にして無二に通ず。而も弥勒は諦觀を以て十方唯識となる。識心円明にして入円成実なり。此れ淨土の正因なり。觀音は如幻聞熏無作妙力なるを以て國土に徧入し、菩提を成就す。此れ淨土の極果なり。

下の文に云わく。⑥

「其の人自ら蓮華中に生じ仏の授記を蒙を見たてまつりて授記を得るを已り、無數百千萬億那由他劫を経て、智慧力を以て衆生心に隨て而も利益と爲す。久しからずして當に菩提道場に坐し、魔軍を降伏

四十華嚴(大正10・846

・c)には

※極微塵數↓極微塵數

世界とある。

※于↓於とある。

降伏魔軍。成等正覺。轉妙法輪。能令佛刹極微塵數衆生發菩提心。隨其根性。教化成熟。乃至盡于未來劫海。廣能利益一切衆生。文竟

全部華嚴。于此結果。諸有智人。決宜信入。一念因循。輪回無盡。嗚呼苦哉。

し、等正覺を成ずべし。妙法輪に転じ、能く仏刹極微塵數の衆生の菩提心を発せしむ。其の根性に隨い、教化を成熟し、乃至未來劫海を尽くし、広く能く一切衆生を利益す」と。

全部華嚴は此れに於いて結果す。諸有の智人は決して宜しく信入すべし。一念を因循せば、輪廻無尽なり。嗚呼苦哉。

五 問 答

① 第一問答

或問。如上五門。爲當從一門入。爲是五門並入。

或いは問う。上の五門の如きは一門より入るべきと爲すや、是の五門の並入と爲すや。

八十八帖右上

答。上根利智。了得自性彌陀。全顯唯心淨土。舉一法身。攝無不盡。然理則頓悟。事須漸除。故華嚴教指。十住初心卽同諸佛。然五位進修。不無趣向。未臻妙覺。階次宛然。至十地始終。以大願力。于一念頃見多百佛多千佛。乃至百千億那由他佛。所居之地。悉隨所見之佛而爲差等。此土行人。縱能伏惑發悟。而未證無生。甯逃後有。不依佛力。功行難圓。必

答う。上根にして利智なるものは、了に自性の彌陀なるを得。全て唯心淨土なるを顯わし、挙ぐ一法身に攝して尽さざること無きなり。然れば理は則ち頓悟なるも事は漸除を須つ。故に華嚴の教は十住の初心に諸仏と卽同することを指すも、然るに五位進修して無趣向ならず。未だ妙覺に臻らざれば階次は宛然たり。十地に至り始終に大願力を以て一念の頃に多百仏・多千仏乃至百千億那由他仏に見ゆ。所居の地は悉く所見の仏に隨いて差等ありと爲す。此の土の行人は縦い能く伏惑して發悟すれども、未だ無性を証せざれば甯ぞ後有を逃れんや。仏力に依らざれば功行は円なること難し。必ず廻向の樂邦を待ち、親しく

待回向樂邦。親承授記。淨諸餘習。成滿願王。斯爲一門超出妙莊嚴路。其或粗窺向上。夫盡疑情。尤須專一持名。翹勤發願。如子憶母。畢命爲期。加以教觀熏修。助發勝智。感應道交。功無虛棄。斯則全憑一念。便攝諸門。所貴絕利一原。[※]

切忌回頭轉腦[※]

※「所貴の利は一原を絶す」と読むべきか。
※「切忌回頭轉腦」は分別を傷む語として解す。

※子…二人称の敬称

又問。子欲闡念佛法門。何不以淨土諸經爲導。而力主華嚴。據果論因。恐難合轍。

答。子不讀無量壽經乎。經中叙分。首述普賢行願。勸進行人。三輩往生。俱云發菩提心。終之以不了佛智不思議智不可稱智無等無倫最上勝智。縱修功德。還墮胎生。然則誠欲坐寶蓮華。登不退地。必也依文殊智。建普賢願。回向往生。

今此華嚴。正當其教。至觀經上品上生者。必誦讀大乘方等經典。言大乘方等。則又莫若華嚴最尊第一。因果無差。有何紆曲。

授記を承け、諸の余習を淨めて願王を成滿すべし。斯れ一門より超出せる妙莊嚴路と爲す。其れ或いは粗にして向上を窺うも未だ疑情を尽さざれば、尤須らく專一に持名すべし。発願を翹勤すること子の母を憶うが如し。畢命を期と爲し、加えて教觀を以て熏修し、勝智を助発す。感應道交して功に虚棄無し。斯れ則ち全く一念に憑りて便ち諸門を撰す。所貴は利を絶して一原たり。切に回頭轉腦するを忌る。

第二問答

又、問う。子、念仏法門を闡かんと欲すに、何ぞ淨土諸經を以て導と爲さずして、力めて華嚴を主となし、果に拠りて因を論じ、難を恐れて合轍するや。

答り。子『無量壽經』を読まざるや。經中の叙分、首に普賢の行願を述ぶ。勸進行人・三輩往生は俱に發菩提心を云う。終に之れ仏智・不思議智・不可稱智・無等無倫最上勝智を了せざるを以て、縦い功德を修するも還び胎生に墮す。然れども則ち誠に宝蓮華に坐し不退地に登らんと欲すれば、必ず也文殊の智に依りて普賢の願を建て、回向して往生す。

今此の華嚴は正しく當に其の教なるべし。『觀經』の上品上生に至る者、必ず大乘方等經典を誦読す。大乘方等と言ひは、則ち又華嚴の最尊第一にして因果無差に若くは莫し。何ぞ紆曲すること有らんや。

八十八帖右下

第三問答

又問。華嚴法界。密義重重。以無量修多羅而爲眷屬。云何唯一念仏門而能普攝。

答。誠如所說。教指宏深。但入道初心。

自有方便。入此一門。乃能徧徹無邊法界。是故善財童子于普賢一毛孔中。過不

可說不可說佛刹微塵數世界。盡未來劫。

念念周徧無邊刹海。此念佛人亦復如是。

以一念本無量故。

且杜順法界觀。特設三門。一真空門。簡

妄情以顯理。卽前念佛法身是。二理事無

礙門。融理事以顯用。卽前念佛功德是。

三周徧含容門。攝事事以顯元。卽前念佛

名字是。

又清涼疏分四法界。

一心念佛。不雜餘業。卽入事法界。心佛

雙泯。一眞獨脫。卽入理法界。卽心卽

佛。大用齊彰。卽入理事無礙法界。非佛

非心。神妙不測。卽入事事無礙法界。是

又、問う。華嚴の法界、密義にして重々なり。無量の修多羅を以て眷屬と爲す。云何が唯一念仏門のみをして能く普攝するとなすや。

答う。誠に所説の如きは教指宏深たり。但、入道の初心に自ら方便有りて此の一門に入る。乃ち能く無辺の法界に徧徹す。是の故に善財童子は普賢の一毛孔中に於いて不可說不可説の仏刹微塵數世界を過ぎ、未末劫を尽し、念念にして無辺の刹海を周徧す。此の念仏の人も亦復是の如し。一念は本より無量なるを以ての故に。

且、杜順は法界觀に三門を特設す。一は真空門。妄情を簡び以て理を顯わす。卽ち前の念仏の法身は是れなり。二は理事無礙門。理事を融して以て用を顯わす。卽ち前の念仏の功德は是れなり。三は周徧含容門。事々を攝して以て元を顯わす。卽ち前の念仏の名字は是れなり。

又清涼の「疏」は四法界に分つ。

一心に念仏して余業を雜えざれば卽ち事法界に入る。心仏雙つ泯じて一眞のみ獨脱すれば卽ち理法界に入る。卽心卽仏にして大用齊しく彰なれば卽ち理事無礙法界に入る。非仏非心にして神妙不測なれば卽ち事々無礙法界に入る。是に知んぬ。一念仏門は法として攝せ

知一念佛門。無法不攝。故此經以毗盧爲導。以極樂爲歸。既觀彌陀。不離華藏。家珍具足。力用無邊。不入此門。終非究竟。

第四問答

ざることを無し。故に此の經は毘盧を以て導と爲し、極樂を以て歸と爲す。既に弥陀を觀えるに華藏を離れず、家珍具足し力用無邊たり。此の門に入らずんば終に究竟するに非ざるなり。

八十八帖左上

又問。方山論謂他方淨土。是權非實。準今所論。如何會通。

又、問う。方山の論には、他方の淨土は是れ權にして實に非ずと謂う。今の所論に準ずれば云何に會通するや。

答。教分四土。一常寂光土。果佛所居。二實報土。法身大士所居。三有餘土。二乘所居。四同居土。凡聖交參。或穢或淨。此土行人。以專念力。修諸功德。回向西方。惑業未斷。生同居土。欣厭既切。粗漏漸除。聞法增進。生有餘土。

答う。教は四土に分つ。一は常寂光土、果佛の所居なり。二は實報土、法身大士の所居なり。三は有餘土、二乘の所居なり。四は同居土、凡聖交參して或は穢或は淨なり。此の土の行人、專念に力めて諸の功德を修し西方に廻向するも、惑業未だ斷ぜざるを以て同居土に生ず。欣厭既に切り、粗漏漸く除く。聞法増進して有餘土に生ず。

若修圓教爲因。深達實相。以普賢行願。回向往生。便感得實報土。親承佛記。分證寂光。是故。住權乘者。一切皆權。如法華化城。不外自心故。明實相者。一切皆實。如此經極樂。全具華藏故。方山著論時。行願末卷未至此方。故于淨土一門。輒生分別。却與經文互相乖刺。須知從真起幻。卽幻全真。生滅俱離。自他不二。

若くは円教を修して因と爲し實相に深達して普賢の行願を以て廻向して往生す。便ち實報土を感得し親しく仏記を承けて、分に寂光を証す。是の故に權乘に住する者は一切皆な權なり。『法華』の化城の如し。自心に外ならざるが故に。實相を明す者は、一切皆實にして此の『經』の極樂の如し。全て華藏を具えるが故に。方山の著論の時、行て經文卷、未だ此方に至らず。故に淨土一門、輒く分別を生じ、却つ願の末に与て互相に乖刺す。須く真に從て幻を起し、幻に即すれば真を全し、生滅俱に離れて自他不二なりと知るべし。

一念圓融。普周法界。方爲一乘中道了義。且方山喫緊提唱。

唯在十住初心卽成正覺。然依教詮判。正大不易。何則圓信位中。見思惑盡。并斷塵沙。進入圓住。豁破無明。證無生忍。位齊別教初地。

若依自力。譬彼羣氓。驟希寶位。卽謂本來是佛。不落階梯。亦賴善巧方便。始能尅證。何如行願末卷中說以深信心。持誦十大願王。一剎那中。往生極樂。住不退轉。從凡夫地。創發信心。橫超直入。至圓至頓。無比無倫。幸遇完經。因緣非淺。衣珠故在。客作徒勞。奉勸高流。同心信受。

八十八帖左下

又問。隋僧靈幹作華藏觀。臨終見大水彌滿。華如車輪而坐其上。但得直趣華藏。何須更觀彌陀。

答。華藏世界。有十不可說佛刹微塵數香

一念に円融して法界に普周し、方に一乘中道の了義と爲す。且く、方山は喫緊して提唱す。

唯、十住の初心に在りて即ち正覺を成ず。然るに教詮に依りて判ずるに、正しく大にして不易なり。何となれば、則ち円信の位の中において見思の惑を尽し、并びに塵沙を断じて、進んで円住に入る。無明を豁破して無生忍を証するに、位は別教の初地に齊し。

若し自力に依らば、彼の群氓の驟に宝位を希うに譬う。即ち本來は仏にして階梯を落ちずと謂い、亦善巧方便を頼り始め能く証を尅める。何如なれば行願の末卷中に深信の心を以て十大願王を持誦して、一剎那中に極樂に往生して不退轉に住すと説く。凡夫地より創めて信心を發し横超に直入す。至円至頓たること無比無倫なり。幸くば完經に遇い因縁淺からざることを。衣珠は故より在り。客は徒勞を作る。高流を奉勸し同心信受せよ。

第五問答

又、問う。隋の僧靈幹は華藏觀を作る。臨終に大水弥滿して、華の車輪の如くなるを見、其の上に坐す。但、直ちに華藏に趣くことを得るに、何ぞ更に弥陀に觀えるを須たん。

答う。華藏の世界に十不可説の仏刹微塵數の香水海有り。十不可説

水海。有十不可說微塵數世界種安住。一世界種。復有不可說佛刹微塵數世界。西方極樂亦在其中。

首楞嚴云。

若飛心中兼福兼慧。及與淨願。自然心開見十方佛。一切淨土。隨願往生。

今靈幹所生。其爲極樂淨土邪。其爲餘方淨土邪。俱未可知。然則但覲彌陀。卽是直趣華藏。前有善財。後有龍樹。如斯軌轍。千聖同行。不違佛勅。自困多岐。是則名爲可憐憫者。更以近事徵之。

宋明州草庵道因修圓頓教觀。晚主延慶。乾道三年四月十七日。別徒衆曰。華嚴世界。洞徹湛明。甚適我懷。今將行矣。乃令舉所述彌陀讚曰。無邊刹海海涵空。海空全是蓮華宮。蓮宮周徧徧空海。空海獨露彌陀容。阿彌陀佛不生滅。難覓難拈水中月。絕非離句如是身。如是感通如是說。我與彌陀本不二。妄覺潛生忽成異。從今掃盡空有塵。父子天然兩相值。誓修三福勤六念。身口意業無瑕玷。我今以此

微塵數世界の種に安住するに一一の世界の種有り。復不可說仏刹微塵數の世界有り。西方極樂も亦其の中に有り。

『首楞嚴』に云く。

「若し飛心の中に福を兼ね慧を兼ね及び淨願を与えば、自然の心は十方の仏に開見し、一切の淨土に随つて往生を願うなり」と。

今靈幹の生ずる所、其れ極樂淨土と爲す邪、其れ余方の淨土と爲す邪。俱に未だ知るべからず。然れば則ち但、彌陀に覲^まえ即ち是れ直に華藏に趣かん。前に善財有り。後に龍樹有り。斯の軌轍の如く千聖同行す。仏勅に違はずんば自ら多岐に困らん。是れ則ち名けて憐憫すべき者と爲す。更に近事を以て之を徵す。

宋の明州の草庵道因^④、円頓の教觀を修し、晚^⑧年^⑨延慶^⑩寺^⑪を主^⑫入^⑬住^⑭とする。乾道三年（一一六七年）四月十七日、徒衆に別れて曰わく、華嚴の世界は洞徹湛明たり。甚だ我が懷に適いたり。今、將に行かんとすと。乃ち、所述の彌陀の讚を挙げしめて曰く。無辺の刹海、海は空に涵る。海空全く是れ蓮華宮、蓮宮周徧して空海に徧す。空海独りのみ露わす彌陀の容、阿彌陀佛は不生滅にして、覓難く拈り難し。水中の月、絶非し句を離る。是の如くの身、是の如きの感通、是の如き我と彌陀と本より不二なり。妄覺潜かに生じて忽ち異を成ず。今より空有の說、の塵を掃盡せん。父子天然ながら相値ひ、誓つて三福を修し六念を勤め、身口意業瑕玷なし。我れ今、此れを以て彌陀を念

八十九帖右上

『仏祖統紀』(大正49

・243・b)には
※脱↓亡とある。

念彌陀。不見彌陀終不默。讚畢。隨衆唱
佛數百。諷觀經至上品上生即斂念坐脫。
極樂華嚴。是同是別。諸有智人。急須著眼。

後記

ず、弥陀を見ずとも終に厭はずと。讚じ畢り、衆に隨いて仏を唱する
こと數百。觀經を諷するに上品上生に至り、即ち念を斂め坐に脱す。
極樂と華嚴、是同是別、諸の有智の人、急ぎ須く著眼すべし。

※敘は叙の別体

是論作于乾隆四十八年冬十二月。既
成。汪子大紳評之曰。此淨土正因。華
嚴正信也。又曰。五念一念。一念無
念。其明年春。過丹徒。王子禹卿見而
賞之。爲之敘。大紳頗歎爲奇特。尋奉
先尙書公諱。既葬。屏居僧舍。展讀
大經。與方外友性宗唯然相質證。輒于
此論時有損益。其後數年。自錢塘歸。
重閉關文星閣中。修念佛三昧。長夏寥
寂。復出前錄點勘再周。稟成此本。于
賢首方山外。不妨別出手眼。設遇雲栖
老人。定當相視而笑也

時乾隆五十六年六月晦際清記

華嚴念佛三昧論終

華嚴念佛三昧論終

時に乾隆五十六年(一七九一年)六月晦際清記

是の『論』、乾隆四十八年(一七八三年)冬十二月に作り既に成す
る。汪子大紳^①、之れを評して曰く。「此の淨土は正因なり。華嚴は
正信なり」と。又曰く。「五念は一念にして、一念は無念なり」と。
其の明年春、丹徒を過ぎ、王子禹卿が見て之を賞め、之が爲に叙す。
大紳の頗歎、奇特たり。尋いで先の尙書公諱を奉じ既に葬る。僧舍
に屏居し『大經』を展読す。方外八仏教の友と性宗の唯然なるを
相質証す。輒ち、此の論、時に損益有り。其の後數年、自ら錢塘
(浙江省杭州市)に歸り、重び文星の閣中を閉關して、念仏三昧を修
す。長夏なるも寥寂たり。復前の稿を出して點勘し再周して此の本
を録成す。賢首八法蔵のや方山の外、手眼の別出たるを妨げざらん
か。設い雲棲老人に遇うも定んで當に相視して笑うや。

※稟は稿の別体

〔註〕

- ① 真諦訳『大乘起信論』(大正32・576・b~c)。ここは「論」では、始覚の義を説く中に出ずる箇処である。『論』では、一切衆生は妄念の世界を現出しており、始覚の完成には程遠く、従って覚と名づけることはできないという。つまり、永遠の過去より、常に妄念が相續しており、いまだかつて妄念を断絶したことがないと主張するのである。
- ② 念仏三昧については、「入法界品」(大正9・690・a~b)に於いて、第三普知識功德雲比丘によって二十一種の念仏三昧門が説かれて、前十門は念仏の勝徳円満を明かし、後の十一門は念仏の妙用自在を顯わしている。
- ③ 『華嚴經』は具には『大方広仏華嚴經』というが、その題号について法蔵は「探玄記」で解説している。今、「大方広」について「然即大以包含為義。方以軌範為レ功。広即体極用周。」(大正35・107・b)と述べている。
- ④ 清涼は華嚴宗第四祖澄観のこと。栞栢は李通玄の別名。一日に栞一〇個と栞葉餅一枚を食していたためそう呼ばれた。
- ⑤ 李通玄の没年は現存資料にみる限り遅くとも七六〇年頃と考えられるので、従って、般若によって『大方広仏華嚴經普賢行願品』(四十華嚴)が翻訳されたのは貞元十四年(七九八年)であるので、彼は四十華嚴を見ることになかったのである。
- ⑥ 王文治。字を禹卿、号を夢樓という。乾隆に進士となる。江蘇省丹徒(鎮江府)の人。夢樓詩集の著書がある。雍正八年(一七三〇年)生。嘉慶七年(一八〇二年)没。「辞海」下冊(台湾中華書局刊)一九二〇頁。『歴代名人年里碑伝総表』(姜亮夫撰・台湾商務印書館発行)四一二頁をそれぞれ参照。
- ⑦ 『観仏三昧海經』(大正十五卷所収)
- ⑧ 『大方広如来不思議境界經』(大正十卷所収)
- ⑨ 『薬師琉璃光如来本願功德經』(大正十四卷所収)
- ⑩ 『阿閼仏国經』(大正十一卷所収)
- ⑪ 『仏説無量寿經』(大正十二卷所収)
- ⑫ 『八十華嚴』卷第五十二「如来出現品」第三十七之三(大正10・275・b)「六十華嚴」卷第三十五「宝王如来性起品」第三十二之三には「此菩薩摩訶薩。自知身中。悉有二切諸仏菩提。何以故。彼菩薩心。不離一切如来菩提二故。如自心中。一切衆生心中。亦復如是。無量無辺。無処不有。不可二散壞。不可思議。」(大正9・627・b)とある。なお、この箇処は如来出現の菩提について十門を説いている中、第十菩提は諸心に普遍なることを明かす処である。
- ⑬ 『八十華嚴』卷第五十一「如来出現品」第三十七之二(大正10・272・c)「六十華嚴」卷第三十五「宝王如来性起品」第三十二之三には「無レ有衆生無衆生身。如来智慧不具足者。但衆生顛倒不知如来智。遠離顛倒。起二切智無師智無礙智。」(大正9・623・c)とある。
- なお、この箇処は如来出現の意義について、十喻を以て如来の十種の大智を顯わす中、第十塵含経卷の喩を以て仏の性通平等の智に喩えている処である。
- ⑭ 『八十華嚴』卷第五十一「如来出現品」第三十七之一(大正10・266・a)「六十華嚴」卷第三十四「宝王如来性起品」第三十二之二には「如来応供等正覚。非二法一行一身一刹化一衆生二故。此菩薩摩訶薩。知見如来具足成就無量法無量行無量身無量刹。平等教化一切衆生二故。仏子。譬如虚空。一切色処非色処。無二処不至。而非二至非不至。何以故。虚空無形色故。如来法身亦復如是。至二一切処一切刹一切法一切衆生。而無二所不至。何以故。諸如来身非二是身二故。随二所応化二示現其身。」(大正9・616・a)とある。
- なお、この箇処は如来身業を明かし、続いて、虚空周遍の喩を以て十方に周遍する仏身を明かす処である。
- ⑮ 『八十華嚴』卷第五十一「如来出現品」第三十七之三(大正10・273・c)「六十華嚴」卷第三十五「宝王如来性起品」第三十二之三には「此菩薩摩訶薩。成就無量無辺無礙智慧。知二一切衆生是如来境界。一切世間。一切刹。一切法。一切衆生行。如如不壞境界。無礙法界境界。實際無際境界。無量虚空境界。非境界境界。是如来境界。仏子。一切衆生無量故。如来境界

無量。一切世間無量故。如来境界無量。乃至非境界境界無量故。如来境界無量。非境界至一切處。而無所不至。」(大正9・625・a)とある。

なお、この箇處は如来出現の境界を明かす處である。

⑮ 『八十華嚴』卷第一「世主妙嚴品」第一之一(大正10・1・c)

『六十華嚴』卷第一「世間淨眼品」第一之一には「了三世法平等智身。普入一切世間之身。妙音遍至一切世界。不可窮尽。猶如虛空。平等法相智慧行處」(大正9・395・a)とある。

なお、この箇處は意と身と語との三業の普周を顯わす處である。

⑯ 『八十華嚴』卷第七「普賢三昧品」第三に「入于三昧。此三昧名一切諸仏。毘盧遮那如来威身。普入一切仏平等性。」(大正10・32・c)と説かれてある。

⑰ 『八十華嚴』卷第六十二「入法界品」第三十九之三(大正10・334・b)

『六十華嚴』卷第四十六「入法界品」第三十四之三には「我於解脱力。速得清淨方便慧眼。普照觀察一切世界。境界無礙。除一切障。一切仏陀羅尼力」(大正9・690・a)と説かれてある。

⑱ 注⑦に同じ。『六十華嚴』も『八十華嚴』と同文。

⑲ 二十一種念仏三昧門の名を列挙すれば次の如くである。下段は『六十華嚴』

一 智光普照念仏門	一 円満普照念仏三昧門
二 一切衆生	二 一切衆生遠離顛倒
三 安住力	三 一切力究竟
四 安住法	四 諸法中心無顛倒
五 照耀諸方	五 分別十方一切如来
六 不可見處	六 不可見不可入
七 住於諸劫	七 諸劫不顛倒
八 住一切時	八 隨時
九 住一切刹	九 嚴淨仏刹
十 住一切世	十 三世不顛倒
十一 住一切境	十一 無礙境界

十二 住寂滅	十二 寂靜
十三 住遠離	十三 離月離時
十四 住廣大	十四 廣大
十五 住微細	十五 微細
十六 住莊嚴	十六 莊嚴
十七 住能事	十七 清淨事
十八 住自在心	十八 淨心
十九 住目衆	十九 淨衆
二十 住神變	二十 自在
二十一 住虛空	二十一 虛空等

⑳ 『八十華嚴』卷第六十三「入法界品」第三十九之四(大正10・339・c) 340

『六十華嚴』卷第四十七「入法界品」第三十四之四には「我若欲見安樂世界無量壽仏。隨意即見。妙樂世界阿閼如来。普住世界師子如来。善現円満光明世界月慧如来。宝師子莊嚴世界毘盧遮那如来。善男子。如是等一切諸仏。隨心意即見。彼諸如来不來至此。我不住彼。知一切仏無所從來。我無所至。知一切仏及与我心皆悉如夢。知一切仏悉如電光。了知己心如水中像。知一切仏皆悉如幻。己心亦爾。知一切仏音聲如響。己心亦爾。如是知。如是解。如是入。」(大正9・694・c) 695・a)と説かれてある。

㉑ 『八十華嚴』卷第六十八「入法界品」第三十九之九(大正10・366・b)

『六十華嚴』卷第五十一「入法界品」第三十四之七には「善男子。我開稱檀仏塔戸時。念正受無尽仏性三昧門。於念念中。得無量無辺勝妙諸法。……略……見此世界迦葉仏拘那含牟尼仏。尸棄仏。毘婆尸仏。提舍仏。弗沙仏。無上勝仏。無上蓮華仏。見如是等不可説不可説諸仏。閻浮提微塵等仏。乃至不可説不可説仏刹微塵等仏。」(正9・717・c)と説かれてある。なお鞞瑟肢羅とは第二十七善知識安住長者のことである。

㉒ 『八十華嚴』卷第十六「須弥頂上偈讚品」第十四(大正10・83・a)「六

十華嚴」には相当文なし。

なお、この箇処は十菩薩の偈讚の中、第八番目の真実慧菩薩の偈文である。

②④ 『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經卷下』(大正8・731・b)

②⑤ 『仏説阿弥陀經』(大正12・317・b)

②⑥ 『八十華嚴』卷第二十三「兜率宮中偈讚品」第三十四(大正10・123・b)

『六十華嚴』卷第十四「兜率天宮菩薩集讚品」第二十には「專念三境界、生起無量心、所見諸如来、其教与心等」(大正9・437・b)と説かれてある。

なお、この箇処は十方の諸菩薩の十段の偈讚のうち、第八段の偈文であり如来の淨他の徳を歎じている処である。

②⑦ 『八十華嚴』卷第十四「賢首品」第十二之一(大正10・73・a)

『六十華嚴』卷第六「賢首菩薩品」第八之一には「若念仏定不可壞、則常觀見十方仏、若常觀見十方仏、則知如来常安住。」(大正9・433・c)と説かれてある。

なお、この箇処は菩薩の諸位を明かす中、十廻向の位を明かしている処である。

②⑧ 『八十華嚴』卷第四十八「如来随好光明功德品」第三十五(大正10・256・a)

『六十華嚴』卷第三十二「仏小相光明功德品」第三十(大正9・605・a)には「八十華嚴」と同一の文あり。

なお、この箇処は如来の随好を明かす処である。

②⑨ ここは取意文である。例えば『八十華嚴』卷第十二「如来名号品」第七(大正10・57・c)60・a)に於いて「隨其所応、説法調伏、如是乃至等法界虚空界、諸仏子、如於来此娑婆世界、諸四天下、種種身、種種名、……略……令諸衆生、各別知見」(大正10・58・c)と説かれ、『六十華嚴』卷第四「如来名号品」第三(大正9・418・a)410・b)に於いて「知彼心行随化衆生、与虚空法界等、何以故、此娑婆世界中、諸四天下教化一切、種種身、種種名、……略……如是種種不同、衆生所見亦異。」(大正9・419・a)

と説かれているをみる。

③⑩ 例えば『八十華嚴』卷第三十四「十地品」第二十六之一で「如是一切諸所作業、皆不離念仏、不離念法、不離念僧」(大正10・183・c)と説かれてある。

③⑪ 『四十華嚴』卷第四十(大正10・845・c)

③⑫ 以下の文は『八十華嚴』卷第七十一「入法界品」第三十九之十二(大正10・386・c)、『六十華嚴』卷第五十三「入法界品」第三十四之十(大正9・736・c)の取意文。

③⑬ 以下の文は『八十華嚴』卷第七十一「入法界品」第三十九之十三(大正10・391・a)、『六十華嚴』卷第五十四「入法界品」第三十四之十一(大正9・741・a)の取意文。

③⑭ 以下の文は『八十華嚴』卷第七十四「入法界品」第三十九之十六(大正10・404・b)、『六十華嚴』卷第五十五「入法界品」第三十四之十三(大正9・753・b)の取意文。

③⑮ 『八十華嚴』卷第八十「入法界品」三十九之二十一(大正10・442・c)443・b)の偈文の中、第八偈頌、第十偈頌、第二十二偈頌、第三十一偈頌の四偈

『六十華嚴』卷第六十「入法界品」三十四之十七(大正9・786・b)では「或見虚舍那、無量無數劫、嚴淨此世界、得成最正覺」(第十六偈頌)。或見阿弥陀、觀世音菩薩、灌頂授記者、充滿諸法界」(第十八偈頌)。或見釈迦文、初成等正覺、佛益諸群生、一切莫能測」(第二十九偈頌)。或見無量寿、最勝天人尊、為授灌頂記、成無上導師」(第三十七偈頌)」と説かれてある。

③⑯ 『四十華嚴』卷第四十(大正10・844・b)の取意文。

③⑰ 『大乘起信論』(大正32・533・a)より抄出。なお、ここは「修行信心分」で不退の方便と念仏往生を明かす箇処である。

③⑱ 『四十華嚴』卷第四十(大正10・848・c)

③⑲ 『四十華嚴』卷第四十(大正10・846・c)

③⑳ 『仏説無量寿經卷下』(大正12・272・b)には三輩について

④① 『六十華嚴』卷第三十二「如来随好光明功德品」第三十(大正9・605・a)には「八十華嚴」と同一の文あり。

「仏告阿難。十方世界諸天人人民。其有至心願生彼國。凡有三輩。其上輩者。捨家棄欲而作沙門。發菩提心。一向專念無量壽仏。修諸功德。願生彼國。此等衆生臨壽終時。無量壽仏与諸大衆。現其人前。即隨彼仏往生其國……略……其中輩者。十方世界諸天人人民。其有至心願生彼國。雖不能不行作沙門。大修功德。當發無上菩提之心。一向專念無量壽仏……略……其下輩者。十方世界諸天人人民。其有至心欲生彼國。假使不能作諸功德。當發無上菩提之心。一向專意乃至十念。念無量壽仏願生其國」(。印筆者)と説いてゐる。

④① 『仏説無量壽經卷下』(大正12・278・a)に「不了仏智。不思議智。不可稱智。大乘広智。無等無倫最上勝智……略……謂之胎生。若有衆生。明信仏智乃至勝智。作諸功德。信心廻向。此諸衆生於七宝華中。自然化生」と説かれてある。

④② 『観無量壽經』(大正12・344・c)には「上品上生者。若有衆生願生彼國者。發三種心。即便往生。何等為三。一者至誠心。二者深心。三者廻向發願心。具三心者必生彼國。復有三種衆生。當得往生。何等為三。一者慈心不殺具諸戒行。二者説論大乘方等經典。三者修行六念」(。印は筆者)と説かれてある。

④③ 『法界観門』一卷は、澄観の『法界玄鏡』(大正45・673・a~683・a)、宗密の『注華嚴法界観門』(大正45・684・c~692・b)等によつて法順の著書として註釈されているが、同時に法蔵の『菩提心章』(大正45・652・b~654・a)の一部をなすものであり、著者に關しては種々問題を含んだ書である。

④④ 四法界については、『華嚴法界玄鏡』卷上(大正45・672・c)に「総以緣起法界不思議為宗故。然法界之相要唯有三。然総具四種。一事法界。二理法界。三理事無礙法界。四事事無礙法界。」とあり、『華嚴經疏演義鈔』卷第一(大正36・2・c)に「二者約四法界。往復無際事也。動靜一源具三義也。動即是事。靜即是理動靜一源。即事理無礙法界也。含衆妙而有余事。事無礙法界也。超言思而迥出。融三法界。」とあり、また、『大華嚴經略策』(大正36・707・c)でも同様に述べてゐるをみる。

④⑤ 方山とは、李通玄を指す。論とは『新華嚴經論』をいう。今第六(大正36・759・b~c)の「浄土權実」を述べる中で、「第十毘盧遮那所居浄土」の内容を明かしているをみる。

注⑥参照。

④⑦ 『統高僧伝』卷第十二(大正50・518・a~c)参照。

④⑧ 『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』卷第八(大正19・142・b)

④⑨ 道因。浙江省寧波府の人。姓は薛氏、字は徳固、草菴、安住と号す。宋哲宗天祐五年(一〇九〇年)生。乾道三年(一一六七年)四月十七日没。仏祖統紀第二十一(大正49・243・a)参照。

④⑩ 江子大神。汪縉のこと。字号を大神といい呉興の人。雍正三年(一七二五年)生。乾隆五七年(一七九二年)没。『二杯唱和詩』(己統二・十五・四・三四六左下)に「汪縉和知婦子偶述」として四首が記されてある。

④⑪ 雲栖。杭州仁和人。雲棲株宏と呼ぶ。字は佛(徳)慧。自ら蓮池と号す。禪教一致を主張し蓮宗九祖の一人に数えられている。嘉靖十四年(一五三五年)生。万曆四十三年(一六一五年)没。詳しくは(1)佐々木月樵全集(二)『印度支那日本浄土教史』「株宏、智旭の浄土教」五八三頁。(2)荒木見悟著「雲棲株宏の研究」、(3)郭朋著「明清仏教」一七六頁の「株宏」をそれぞれ参照。